

三 農村組織の構造と編成論理

農業総合研究所 相川良彦

一 問題意識

近代社会は、物的支配と人的関係が所有権と契約とに分裂・独立し、抽象化、絶対化されていることを特徴とする。近代化された社会における物象化のメカニズム―普遍性をもちえた媒体が、共通の対象となることによって、基準（＝権威）となりえるという法則の生成・展開の論理―として、二通りがある。第一の、並列な人間関係下の法則は、市場原理にねざす、競争圧力を媒介とした、人々の内面的な規範・欲求にもとづく自由な選択行動の相互作用の結果として生じる。第二の、垂直な人間関係下の法則は、資本原理にねざす、剰余価値をめぐる資本と労働の階級的対抗とそこでの資本支配権の貫徹という形で現れる。さらに、法則の生成・展開の領域は、媒介の形態のよって三面―貨幣・資本などが媒介となる経済、組織・国家などが媒介となる社会、理念・意識・言葉などが媒介となる文化―がある。そして、これら分離された三面の形象は、二通りの筋道を経て統合される。一つは、生産手段の所有が生産力および生産関係の基底であることを介して、もう一つは、資格の相違をとわず個人を集団化せしめる一定の枠―「場」の共有を介して、である。

二 農村社会の実態認識

① 伝統的「家」は、家産的に所有される土地（財産）の維持を目的として、家族成員の協力と勤労を内容とするリジッドな行動規範体系として構成された。家産としての土地の一括継承を原則とする。

今日、「家」意識は消滅したが、土地の家産視、家族を社会的・経済的単位とするなど、広義の「家」意識はなお存続している。②私地的土地所有権の確立によって、土地所有権売買をめぐる社会関係はドライなものとなり、寄生地主が伸張した。地主に対する小作農の抵抗が集落を場として起き、その延長線上に農地改革が行なわれた。農地改革は農地市場を閉塞させ、農地移動には社会関係が色濃くまつわりつくようになった。③藩政期の身分制度は、社会的地位と土地所持とを不可分に結合していた。体制的支えを失った明治以降、村落は農家間の利害調整の場となり、土地基盤整備の遂行を共同の仕事とした。村落内では、血縁、地縁、約縁が生活局面に庇じてとり結ばれ、これら関係の密さが、村落のまとまりに影響した。④希少資源である土地の調達を契機として結成される生産組織は、経営が軌道にのると共に、組織自立の条件が芽生える。それと共に、剰余分配をめぐる地代と労賃の対立を軸に、兼業農家と専業農家の対立という形で顕在化する。

三 農村社会における法則の生成と作用

農村社会の近代化の諸相を、経済、社会、意識の三面でみてみる。①経済面では、商品経済の論理の貫徹が志向される反面、「家」における家産的土地所有の根強さ、希少財としての土地商品化の難しさ、生産組織の剰余分配をめぐる地代と労賃に現われる土地所有の壁の厚さ、などが示唆される。②社会面では、契約的秩序関係への転換が志向される反面、「家」の役割秩序関係とまとまりの維持、生産組織の機能性追求を阻害する村落規範の存在、などが指摘される。③意識面では、規範としての意識の純化とそれに伴う経済的・

社会的規制力の弱化が起きる反面、広義の「家」意識の健在や現代農民女性の家族志向、合意形成や生産組織運営に貫かれる村落規範の存在、を確認しうる。

水平・垂直という二通りの物象化メカニズムの作用の仕方に関して、①希少資源の独占とタテ組織による効率達成が重要な経営体（「家」や受託組織）において、垂直的メカニズムの作用が大きい。②社会面では、ヨコ組織で農家間利害調整を行なう組織体（村落や村落ぐるみ組織）において、水平的メカニズムが比較的良好に作用する。③意識は、観念的であり、物的・社会関係の制約から比較的自由なために、水平的メカニズムがよく作用する、と整理しうる。

四 農村社会編成の論理

血縁原理は、親子関係を軸としたタテ型組織であり、成員間対価を求めぬ情緒的關係として基本的に結合している。地縁原理は、他人どうしの並列等関係によるヨコ型組織であり、成員間の関係は得失均衡を原則とする。約縁原理は効率や利益極大などの目標に向けて、一時的、機能的に結成される。これら組織原理の統合の仕方として、一つは、市場を前提に、商品経済の論理の貫徹である。ここでは、分離した経済関係と社会関係とが生産手段の所有と剰余の分配を介して、統合される。もう一つは、希少資源である土地の占有を基礎とした社会秩序編成の原理である。それは、人為的な社会関係をベースとした、永続的、総合的、政治的な資源独占にねざす組織の論理である。

なお、五 集落論諸説、六 生活環境主義、へのコメント要旨は省略。